

不安を訴えることもなかった。

36) 外腹斜筋筋膜反転法にて修復した腹壁癪痕ヘルニアの一例

石川 卓・皆川 昌広(信楽園病院)
大橋 泰博・佐藤 攻(外科)

今回我々は、再々発をきたした腹壁癪痕ヘルニアの症例に三回目の修復術を行うにあたり、メッシュと併用して外腹斜筋筋膜反転法を施行したため、その手技を報告する。

症例は70歳の女性。昭和62年、子宮癌にて手術、術後放射線照射をうけた後、腹壁癪痕ヘルニアを合併。平成9年11月に一回目の修復術、平成10年7月にメッシュを用いて二回目の修復術を施行したが、再発を繰り返し、平成13年2月25日、ヘルニア嵌頓による腸閉塞にて入院した。3月12日、三回目の修復術を施行。メッシュと併用して外腹斜筋筋膜反転法をおこない、良好な結果を得た。

37) mesh plug 法による鼠径ヘルニア手術の長期経過に関する検討

蛭川 浩史・遠藤 和彦
大川 彰・渡辺 直純(秋田組合総合病院)
堀川 直樹・木村 愛彦(外科)

mesh plug 法による鼠径ヘルニア根治術の長期経過をアンケート調査により検討。対象：鼠径ヘルニア術後症例のうち1998年1月から2000年11月までの mesh plug 法による41例、コントロールは1994年1月から1995年9月までに行った従来の術式の Bassini 法などによる45例および1999年10月から2000年11月までに行った plug を使用しない術式の two lay mesh 法による41例。結果：mesh plug 法では従来の方法、two lay mesh 法に比し術後の排便障害、排尿障害の出現が有意に多かった。まとめ：mesh plug 法は長期経過として plug の影響によると考えられる排便、排尿障害が出現する可能性が高く詳細な経過観察が必要である。

第37回新潟脳神経外科懇話会

日時 平成12年12月9日(土)
10:00~15:00
会場 新潟大学医学部
第4講義室

一般演題

1) Blocking balloon を用いて carotid stenting を試行した1例

伊藤 靖・曾我 洋二(新潟こばり病院)
脳神経外科
小池 哲雄(新潟市民病院)
脳神経外科

Blocking balloon を用いて carotid stenting を試行した1例について報告する。症例は63歳男性。他院にて心筋梗塞に対する CABG の術前検査で左頸部内頸動脈高度狭窄、右頸部内頸動脈70%狭窄を認めた。左 STA-MCA anastomosis 後、CABG を試行した。その後当院で follow up の血管撮影を試行。CABG、STA-MCA anastomosis とともに patent であったが、右内頸動脈狭窄の進行を認めた。SPECT 上も右大脳半球の血管反応性の低下を認めた。以上より右内頸動脈狭窄に対し stenting を試行した。局麻下に4 lumen bi-balloon カテーテルで総頸動脈、外頸動脈を遮断するいわゆる proximal blocking を行いつつ、前拡張及び Palmatz stent による stenting を行った。術中、後とも問題なく経過し、SPECT 上も血管反応性の改善が認められた。

頸動脈狭窄に対する PTA, Stenting は他領域と異なり distal embolism に対する対策が必要となる。今回は proximal blocking を用いたが、術中に操作部より distal を遮断する distal blocking の方がより確実な方法である。新たな material の開発により distal blocking が可能となっており、現在はできる限り distal blocking を行うを方針としている。しかし distal blocking を用いても完全に distal embolism を防止できるとは言い難く、今後さらなる技術、material の開発が必要である。